



JAPANESE LANGUAGE EDUCATION METHODS

第47回 日本語教育方法研究会
日本学生支援機構東京日本語教育センター（東京都新宿区）
2016年9月24日（土）

9月24日に日本学生支援機構東京日本語教育センターで第47回研究会を開催いたします。今回も昼食交流会を企画しました。会場で昼食をとりながら、自由楽しく意見交換をしていただければと思います。是非とも多数の方々にご参加いただけますよう、ご案内申し上げます。

会長 衣川隆生

TABLE 1 第47回研究会開催について

日時 :	2016年9月24日（土）
会場 :	日本学生支援機構東京日本語教育センター
開催委員 :	平山允子（日本学生支援機構東京日本語教育センター） 小河原義朗（事務局：北海道大学）

TABLE 2 開催スケジュール

午前		午後	
9:15	受付（発表者・一般） ポスター貼付	1:45	昼食交流会終了
10:00	開会の挨拶	2:00	総会
10:05	会の進め方の説明	2:30	口頭発表開始
10:10	口頭発表開始	3:30	ポスターセッション開始
11:10	ポスターセッション開始	5:00	ポスターセッション終了
12:40	ポスターセッション終了 午後のポスター貼付	5:05	講評・JLEM賞発表 次回開催委員挨拶 閉会の挨拶
12:45	昼食交流会開始		参加者全員で片付け

【参加方法】

事前申し込みは必要ありません。直接会場においでください。非会員の方でも、会場手続きをして参加することができます。皆様、お誘い合わせの上、ご参加ください。なお、会場での現金の授受はできるだけ避けたいと思いますので、会員の方、会員になるご予約の方は、事前の会費納入（p.10参照）にご協力ください。

新規入会：3,000円（年会費）

当日のみ参加：2,000円

【プログラム】

【午前の部】

●口頭発表（5件）

1. 実社会につながる「日本文化クラス」の実践報告—体験型授業での日本語学習と異文化理解—

林田なぎ・秋葉幹枝（早稲田文化館）・井上里鶴（筑波大学大学院生）

本発表は、日本語学校において「実社会につながる授業」をめざして行った日本文化クラスの実践報告である。2016年度春学期（4月—6月、全6回）開講し、午前・午後合わせた受講者は72名であった。クラス設計では、伝統的日本文化（茶道、着付け、寿司づくり、昔の遊びなど）の体験を通し、日本語学習とともにその背景にある精神文化を伝えることを念頭に置いた。受講者の書いた毎時間のコメントシート（全295枚）を分析した結果、言語的側面および文化的側面において様々な学びを得ていることが明らかになった。発表では、実践の詳細とともに受講者の学びを報告し、その学びが実社会につながる可能性について議論する。

2. CEFR の理念を基盤としたカリキュラムとは—B1 レベルの教科書作成の実践から—

櫻井直子（ルーヴァン・カトリック大学）

ルーヴァン・カトリック大学日本学科では4年間にわたり、CEFR B1 レベルの言語活動、及び言語能力に関しグルノーブル大学（フランス）と共同研究を実施した。その成果として、学習者の複言語・複文化能力を高め、社会での実践者となることを手助けするカリキュラムとはどのようなものかが見えてきた。その結果を踏まえ、現在、CEFR B1 レベルの教科書の作成に着手している。本発表では、プロジェクトの成果と現在作成中の教科書とその作成過程を紹介することで、CEFR の理念を基盤としたカリキュラムとはどのようなものかを考察したい。また、意見交換に作成中の教科書をよりよくするための示唆を得たいと考えている。

3. 中級の語彙・漢字教材作成の構想

平山允子（独立行政法人日本学生支援機構）

発表者の勤務校では、日本の高等教育機関への進学を志望する留学生たちが学んでいる。日本語予備教育において、留学生たちは進学までの限られた期間内に多くの日本語の語・漢字を学習しなければならない。本発表では、中級レベルの語彙・漢字学習の効率化のために、a. 語彙学習の後で漢字学習を行う、b. 対義語・類義語の同時学習を避ける、c. 進学予備教育の目的に即した語彙頻度調査結果を学習目標語の選定と提出順に反映させるという方針の下に、新しい語彙・漢字教材作成の構想を示す。

4. アカデミック・ライティングにおける引用指導の課題—教材分析を通して—

近藤裕子（大正大学）・中村かおり（拓殖大学）・向井留実子（東京大学）

アカデミック・ライティングにおいて、引用は剽窃などに関わるとりわけ重要な問題であるため、その指導は特に力を入れて行われてきた。近年は形式や倫理的指導などの解説にとどまらず、引用練習を備える教材も増えてきている。しかし、それらを使用してもなお不適切な引用は多く見られる。引用を適切に行うには論の展開に応じて、形式を選択する、適切な解釈を加えるなどが必要である。本発表では既存の教材を取り上げ、こういった適切な引用に向けての練習が十分に行われているかを個々に検証し、その課題を述べる。

5. 図・絵ですすめる農学系プレゼンテーション活動

上原真知子・小熊貞子・広田妙子・山崎真弓・本郷智子（東京農工大学）

理系大学院で農学分野の研究活動を行っている初中級レベルの留学生を対象としたプレゼンテーション活動について報告する。研究室で日本人と共に実験、調査を行っている留学生にとって、自分の考えを日本語で伝えることは重要である。本活動は、学習者が熟知している専門分野に関する事柄のメカニズムを、プレゼンテーションという手段を使って説明することで、日本語で論理的に伝える能力を養成することを目的としている。学習者がクラスメートとのやりとりを通して、図・絵を用いて話を組み立てていくプロセスを繰り返すことにより、口頭表現能力を養成する活動として位置づけられる。

●ポスター発表（上記5件を含む17件）

6. 大阪圏技能実習生への大阪方言教育の実践報告

楠田瑛子（立命館大学）

大阪圏技能実習生は日本人社員から大阪方言で話されることが多い。しかし、来日前後の研修では共通語や日本の生活習慣を学び、企業派遣後は実務研修・残業・休日出勤等があるため、大阪方言を学ぶ時間はほとんどない。時間的制約があり、大阪での実務研修時にのみ大阪方言が必要な大阪圏技能実習生には、日本人社員が大阪圏技能実習生によく使用する大阪方言を中心に、かつ効率的に教えるのがよいと思われる。そこで筆者は、大阪圏ベトナム人技能実習生6名に、大阪方言教育を試みた。授業後にアンケート調査を行った結果、普通形に接続する大阪方言文型は対応する共通語と接続部分に違いが多いため、特に混乱しやすいということ等が明らかになった。

7. 単純名詞のアクセント教育の実践

河野俊之（横浜国立大学）

「セーター／スプーン／コーヒー／いもうと／テーブルです。」など、 n 拍の語には、 $n+1$ のアクセント型があるとされる。しかし、実際には、動詞辞書形が2つの型しかないなど、型が限定できるので、それを積極的に教育することを筆者らの作成した音声教科書では奨励している。本研究では、単純名詞でも、語種や拍数などで分類すると、型は偏っていることが分かった。それをもとに、単純名詞について、まずは、どのアクセント型が多いかを教え、実際の音声を聞いた際に、それと同じか違うかを考えること、さらに、違う場合は、どの型であるかを考えることについて教育を行うことで、一定の効果が得られたので、それを報告する。

8. 数学・物理に共通する専門用語の理解度

青木由香利・山田裕紀（東海大学）

留学生にとって数学や物理を学ぶとき、専門用語の取得は不可欠である。物理は日本語の習得なしには学べない。一方で数学は、日本語ができなくても解ける問題も多くあり、用語を覚えなくても数学の習得はある程度可能である。しかしながら、用語を理解できていないと、専門科目を学ぶときに、苦勞することが多くあるようである。本論文では、その二つの科目の指導方法の違いに着目し、物理（力学）と数学に共通する専門用語を選び、双方における理解度を検証した。本発表の目的は、特に数学での日本語の専門用語の習得の強化を目標に、物理で学んでいることとどのようにつなげて学生が考えているかを検証するものである。

9. 上級日本語学習者への「LTD話し合い学習法」の適用－新聞記事を利用した読解授業－

森山仁美（佐賀大学）

「LTD（Learning Through Discussion）話し合い学習法」（以下、LTD）を日本語教育の読解授業に適用した。LTDとは協同学習の一技法であり、仲間同士の対等な話し合いを通して参加者一人一人の学習と教材の理解を深めることを目的としている。今回、森山（2014）（2015）の授業実践を踏まえ、新聞記事を読解教材として利用し、LTDを実践した。その結果、話題に対して学習者一人一人が考えを深めることができ、日本社会への理解や批判的思考を促す様子が見られた。また、新聞記事を利用したことで、ニュースへの関心もさらに高まり、授業外でも友人や日本人とニュースについて話すようになった。

10. タスク授業での学習者の学び－語句の正確性－

駒田朋子・伊東克洋・井手友里子（南山大学）

百濟(2013)を参考に、中上級日本語コースでタスク中心授業を行った。学習者は、まず与えられた課題について自身の考えを3人グループで述べ、次にそのグループで話し合っってグループとして考えを統一し、最後にそれを他のグループの前で発表した。この一連の学習活動を録音・文字化し観察したところ、学習者は話し合いの中で正確な表現を見つけ、発表時にはより正確な表現を使っていることが見られた。このことから、タスク中心授業は言語面での正確さに寄与する学習活動であると言える。（参考文献：百濟正和(2013)「TBLTの日本語教育への応用と実践－タスク統合型の言語教育デザインに向けて－」『第二言語としての日本語の習得研究』第16号

11. コミュニケーションのための日本語作文授業の実践研究

内田さくら（東呉大学大学院生）

本稿は、コミュニケーションを重視した作文授業を行い、作文授業のあり方を検証するものである。筆者は、台湾の大学の日本語専攻において、作文授業に対する否定的な印象を持っている学生が多いということを目の当たりにした。そこで近年注目されているCEFRの概念を利用し、コミュニケーション場面を考慮した作文授業をデザインした。本稿では、学生に対し、アンケート、PAC法によるインタビューを行い、学生にどのようにとらえられているかを調査をすることで、実践の効果を検証する。

12. 様々な場面における配慮表現の日中対照研究—主に会話の機能的要素について—

趙麗（恵泉女学園大学大学院生）

従来、日本語母語話者と中国語母語話者の言語行動について、前者は思いやりから周りを配慮しながら会話していることに対して、後者は自己中心的で、周りの評価を気にせず自己主張をされると言われている。このステレオタイプ的な考えを是正する必要があるのではないか。本発表では、謝罪、断り、勧誘、依頼、問いかけおよび指摘の6つの場面における配慮表現について、日本語母語話者と中国語母語話者は会話では、具体的にどのような点に配慮しているかを明らかにする。そのために行った20代前後の日本語母語話者と中国語母語話者の大学生に実施した質問紙調査の結果から、日本語と中国語の言語表現方法の共通点と相違点を述べる。

13. 初級日本語学習者同士の初対面会話活動における意識—好印象を与える／受ける要因に着目して—

玉石知佳・武田誠・伊吹香織・岩崎浩与司・杉本美穂・藤本恭子（早稲田大学）

筆者らは初級前半を終えた学習者に対して、文型などの言語形式に偏らない、相手を意識したコミュニケーションの機会を提供するため、学習者同士の初対面会話活動を実施した。その後インタビューなどを行い、学習者が持つ意識を、好印象を与える／受ける要因に着目して分析した。その結果、学習者は「態度／人柄／外見」「会話の発展」「日本語能力」の3つの要素を意識していることがわかった。このうち「日本語能力」では、知らない表現を教わる、相手がわかる日本語を選ぶといった、コミュニケーションを円滑に進めるため互いに歩み寄る過程が、好印象を与える／受ける要因となっているなど、3つの要素それぞれに特徴的な要因が見られた。

14. 学習者は「学習の振り返り」をどう捉えていたのか—アメリカのある大学での実践から—

末松大貴（名古屋大学大学院生）

本研究では、アメリカのある大学の日本語クラスで行った一週間の学習の振り返りを対象として、学習者が学習の振り返りについてどのように意識していたのか、そして振り返りの際にどのようなことを述べていたのかを分析した。その結果、振り返りについて肯定的に考えていた学習者とそうでない学習者がいたこと、そして両者の違いとして、自身の過去の経験や将来の目的などを関連づけて一週間の振り返りをしていたかどうか、という点があることが分かった。この分析と結果に基づき、学習の振り返りをする際にはどのような点を支援すれば良いのかという点について考察する。

15. 教室外学習支援の方法を探る—教師対象アンケートから見えてくるもの—

渋谷博子・清水由貴子（東京外国語大学）

学習者の教室外学習環境は整備されつつあるが、今後も必要な教室外学習への支援方法を探るため、国内の日本語学校の教師を中心にアンケート調査を行った。質問として(1)求められた支援の内容、(2)行った支援の内容、(3)教師がすべき支援、等を尋ね、それぞれ(1)主に試験対策教材情報や、聴解等の学習方法を聞かれ、(2)主に紙媒体の教材や経験上よいと思われる従来型の勉強方法を紹介し、(3)教室外学習のための情報提供が必要と考えており、そのためには多様な媒体（web教材等）を使った学習環境の状況を把握しておきたいが、実際は把握しきれていないということ等が明らかとなった。本発表ではこれらの結果をまとめ、教室外学習の支援方法の一端を示す。

16. 身体部位を表す方言語彙の表示システム 第2報

北村達也（甲南大学）・篠本尚輝（甲南大学学部生）・今村かほる（弘前学院大学）・岩城裕之（高知大学）

EPAによる外国人看護師や介護福祉士（非日本語母語話者）が日本語母語話者の看護、介護に従事する場合、

身体部位や身体症状を言い表す方言語彙の理解が難しく、コミュニケーションにおけるハードルとなっている。そこで、本研究では、PC、タブレット上で身体部位を表す方言語彙を提示するシステムを開発している。本システムでは、画面上に全身および顔面のイラストが表示され、各部位をマウスでクリック対応する方言語彙がポップアップされ、訳語と音声の提示ができる。特に音声が入ることは、文字では伝えきれない微妙な発音が確認でき、有利である。本システムは看護、介護する側が方言を理解できない日本語母語話者にも有効である。

17. メキシコ人日本語学習者の興味の分類の試み：学習歴の違いによる興味の内容の異なりに着目して

佐藤梓（北海道大学大学院生）

外国語学習環境の言語学習者は、言語そのものや言語に関連する事柄に何らかの興味を持ち、学習していることが多い。興味は、内発的動機づけの一つとして捉えられ、学習継続や学習促進に関連することが指摘されている。また、最近の研究では、興味が発達や深化をすることをふまえ、興味の内容をより詳細に分類する研究などが行われている。日本語教育の領域では、興味を詳細に分類した研究はまだあまり行われていない。そこで本研究では、メキシコの日本語学習者を対象に、日本語や日本に関連した事柄への興味について調査を行った。本発表では、学習歴による興味の内容の異なりに着目し、対象者の興味の分類を試みる。

【午後の部】

●口頭発表（5件）

18. 『できる日本語』を用いた大学集中日本語教育の実践－『みんなの日本語』と比較して－

松田真希子・松田佳子（金沢大学）

近年、課題解決型・学習者の自律性重視の初級日本語教材が出版されているが、大学でそれらの教材を使用した場合の実践報告はあまり見られない。本発表では『できる日本語』初級、初中級（嶋田和子監修、アルク、2011）を大学で使った場合のシラバスデザイン、授業実践結果、教育効果、課題について、以前使用していた『みんなの日本語初級』1，2の場合と比較して報告する。具体的には、『みんなの日本語』を用いて授業を行う場合と比べ、聴取と産出が伸びること、文法形式の知識が劣ること、アカデミックな文脈化が必要なことなどを報告する。

19. 課外活動を取り入れた地域の文化・産業を学ぶ授業の設計と課題

内丸裕佳子（岡山大学）

本発表は、中級および上級レベルの日本語学習者を対象とした、地域の文化・産業を学ぶ授業の設計と2度の実践における課題を報告するものである。1年目は留学生と日本人との協働学習により、5つのテーマについて学んだ成果をプロジェクトワークとして壁新聞にまとめる形式をとった。1年目の授業アンケートの結果をもとに、2年目はテーマを大幅に見直し、学習形態を変え、課外活動を取り入れる等の改善を行った。本発表では、2度の実践におけるシラバスの相違点、課外活動をはじめとする指導上の留意点、学習者間のレベル差を配慮した資料の提供方法、学習評価、アンケート調査の結果、および今後の改善点について述べる。

20. 日本語クラスでのプロジェクトワークにおける教師の役割－コースの枠組みと意図を学習者と共有することに着目して－

島山理恵（立命館大学）

日本語能力が上級～超級レベルにある大学学部留学生のクラスにおいて、地域社会を対象とするプロジェクトワークを行った。教師がデザインしたコース設計のもとに踏み出したが序盤で行き詰まり、振出しに戻ることを余儀なくされた。仕切りなおしの末にワークが軌道に乗り加速したのは、履修生全員にコース設計の意図が受け入れられ、その上で、プロジェクトの目的・過程・ゴールを共に再検討し、共通理解が築けて以降であった。本発表ではその過程を事例とし、プロジェクトワークにおける教師の役割を再考するとともに、コース運営上の意思決定に学習者も参画することの重要性を検証したい。

21. 上級前半レベルにおけるレポート課題のためのルーブリック作成と改善－評価観点の「ずれ」に着目して－

安田励子・山同丹々子・高橋雅子・伊藤奈津美・藤本朋美（早稲田大学）

発表者らが担当する上級前半レベルの科目「総合日本語6」では、2016年春学期現在、同一シラバスの4クラ

スを各2名の教員が担当している。授業の中でレポート作成の比重は大きく、複数の教員がレポートの添削・評価を行うため、評価の公平性の担保が求められる。そこで、教員と学習者が参照可能なルーブリック評価表を作成し、「評価の公平性」を担保するとともに、学習者への明確な「到達目標提示」、「自律的な取り組みの促進」を目指した。発表者らは、作成した評価表の公平性を確認し改善点を明らかにする目的で、初見のレポートを各々評価し、すり合わせを行った。本発表では、その際に見られた評価観点の「ずれ」について報告する。

22. 苦手意識を軽減する口頭表現授業の実践ーピア・ラーニングの視点からー

清水慶子（東海大学）

日本語学習者の中には、普通の会話はできても公の場での口頭表現能力に自信を持ってない学習者が少なくない。そこで本実践研究では、一人でするプレゼンテーション本番までに複数のグループ活動を段階的に行い、学習者の心理的負担を軽減するよう努めた。このグループ活動及びコース運営に対する学習者の評価をピア・ラーニング（協働学習）の視点から検証した結果、小さなグループ活動から大きなプレゼンテーションへと段階を踏むことが学習者に安心感を与え、練習回数や課題が多くなることも好意的に捉えられていることが認められた。

●ポスター発表（上記5件を含む17件）

23. 日本に関する身近な疑問を題材にした初級レベルからの話し合い活動

中野陽（大阪府立大学大学院生）・内藤真理子（関西学院大学）

初級の学習者を対象とした聴解・口頭表現の授業において、日本に関する身近な疑問（例：「なぜ日本の男子中高生は丸坊主が多いのか」「なぜ日本人は日傘を差すのか」など）をノートに記入させ、それをグループの中で共有したのち、その理由を全員で推測するという活動を行った。この活動を行ったのは、初級の聴解・口頭表現の授業では、機能会話に偏りがちだが、それ一辺倒ではなく、自己表現活動も充実させる必要があると考えたからである。本稿では、一学期を通して行った活動について、学生へのアンケート調査やノートの観察からこの実践の意義を探り、改善点を検討する。

24. 3者間非対面接触場面のLINEコミュニケーションの分析

副田恵理子（藤女子大学）・船橋瑞貴（群馬大学）・中井好男（同志社大学）

近年、SNSの急速な普及により留学生にとっても非対面コミュニケーションに必要となるスキルを身につけることは重要である。そこで、本研究では、学部留学生1名と日本人チューター2名のLINEグループでのやり取りと留学生・チューター双方へのインタビューデータを分析することにより、LINEグループコミュニケーションにおいて何が問題となり、どのようなスキルが必要となるのかを明らかにした。その結果、LINE特有の即時性や話題の並列性、非言語情報に起因する問題や、3者間特有の問題が見られた。さらに、日本人は社会言語学的側面も問題点として挙げており、LINEコミュニケーションにおいては幅広いスキルが必要になることがわかった。

25. アカデミックな日本語力養成を目指した聴解Can-doリストの開発

工藤嘉名子・大津友美（東京外国語大学）

東京外国語大学留学生日本語教育センターの全学日本語プログラムでは、教育内容の可視化と共有を図り、学習・教育の接続を実現するための共通評価指標として、「全学日本語Can-doリスト（仮称）」を開発中である。Can-doリストは、アカデミックな日本語力の養成を目指し、「読解」「聴解」「文章表現」「口頭表現」の4技能について、初級から超級までの8レベルの評価指標が記述されている。本発表では、「聴解」のCan-doリストについて、その開発のプロセスと、各レベルの①Can-do目標（到達目標）、②Can-do目標細目（下位目標）、③聴解課題がどのように設定され、体系化が試みられているか説明する。

26. 教育用SNS「Edmodo」を使った文章表現活動

岩崎浩与司（東京農工大学）

筆者は大学のJLPT対策クラスにおいて、1学期にわたって教育用SNSのEdmodoを利用した文章表現活動を行った。この活動では、教室外の課題として写真と文章をSNSに投稿し、教室内ではその内容について話し合った。学期終了時には受講者4名にインタビューを行い、データを基に活動がどのような学びになったのかを考察した。

学習者は文章を書く活動の中で新しい語彙を調べたり、教師や他の学習者の文章から表現や文章の書き方を学んだりしていたことがわかった。また、この活動を通して、互いの書く文章の内容にも興味を持って読んでいたことがわかった。そして、この活動が教室の支持的な風土の醸成にも役立ったことが示唆された。

27. 相手の意図・解釈への意識化を軸とした「やりとり」授業—文法・トピック・機能融合型シラバスの設計—
今泉智子（北海道大学）

本発表は、他者との協働や人間関係の構築に必要なコミュニケーションスキルの習得を目指した「やりとり」科目の、中級前期レベルでの授業実践を報告するものである。円滑なコミュニケーションのためには、課題解決を目的とした「交渉型やりとり」の中で、相手の解釈を考慮して効果的な働きかけを行うこと、及び、相互理解を目的とした「交流型やりとり」の中で、相手の意図を理解して適切に反応することが必要である。中級前期レベルでは、正確な表現で、相手を気遣いながらやりとりできることを目標とし、そのために必要なストラテジーと文法項目を意識化して学習できるよう、文法・トピック・機能融合型のシラバスを設計した。

28. 日本語と韓国語のうなずきに関する一考察—日・韓母語話者の使用実態に基づいて—
山本花江（韓信大学）

私たちは会話において、非言語行動によっても、情報を伝え、受け取っている。これは、非言語行動にもそれぞれの言語体系があるということであろう。そこで、本研究では、日・韓母語話者の会話におけるうなずきを運用面から調査、分析し、それぞれのうなずきの用いられ方の特徴について明らかにすることを目的とする。その結果、回数、機能による相違の他に、日本語母語話者は連続してうなずくことが多く、韓国語母語話者は言語行動とともにうなずくことが多いという点が異なっていた。このような相違は、日本語の会話は共話型であり、韓国語の会話は対話型であるという会話の型が影響しているためだと考えられる。

29. スライドの見せ方が学習者の理解や思考に与える影響
田中千恵（名古屋大学大学院生）

スライドの見せ方の違いが学習者の理解や思考に及ぼす影響を調べるため、初級日本語の授業を実践した。一枚のスライド上のイラストを一部ずつ提示していく見せ方と、スライド上の情報を一度ですべて提示する見せ方という二種類の見せ方で授業を行い、アンケートをとった。その結果、比較的難しいと思われる文法項目では一部ずつ、比較的簡単だと思われる文法項目ではすべてを一度に見せたほうが、学習者の理解や思考を促せるのではないかということが示唆された。

30. 初級日本語学習者の口頭表現能力向上に関する一考察—教科書分析および日本語教師へのアンケート調査をもとに—

井口祐子（恵泉女学園大学大学院生）

初級日本語学習者の口頭表現能力は従来軽視されてきた。本発表では、初級日本語学習者の口頭表現能力向上のための研究として、接触場面から見る会話管理の視点から、初級教科書の分析結果と日本語教師へのアンケート調査結果について述べる。『みんなの日本語初級Ⅰ・Ⅱ 第2版』と『できる日本語初級』のモデル会話の比較分析の結果、あいづち、フィラーの有無で自然な会話に近づくということ、また、日本語教師のアンケート調査の「授業で教師が意識していること」という項目から、教師の会話管理の要素への意識はそれほど高くないということ、がわかった。この2つの調査結果から、会話管理の要素の重要性を再考し、授業案を提示する。

31. 学習者は何を基準に漢字学習活動中産出した単文から「MyBest文」を選んでいるのか
高橋志野（愛媛大学）

愛媛大学の漢字クラスBは初級レベル漢字終了以上の学習者全てを受け入れるため、少人数グループを日本人サポーターが支援し要所で教師が介入する形態で授業を行っている。本発表では、この漢字クラスで、学習者が産出した単文の中から最良のものとして選んでクラスで発表する「My Best 作文」（以下MB文）活動で、学習者が何を基準にMB文を選んでいるかインタビュー調査を行った。その結果、日本人サポーターからの評価だけでなく、自分の国や文化の情報や自分の意見・信念が伝えられる「内容」そして他の学習者が楽しんでくれると思われる「内容」かどうか、MB文を選ぶ際の基準にしていることが明らかとなった。

32. 視覚に障害をもつ学習者への授業における困難さー授業ダイアリの分析からー

河住有希子（日本工業大学）・浅野有里（日本国際教育支援協会）・北川幸子（神田外語大学）・藤田恵（立教大学）・秋元美晴（恵泉女学園大学）

視覚に障害をもつ学習者への日本語教育に関わる教員の授業記録を分析し、教室活動において晴眼者に対する日本語教育とは異なる点を明らかにする。応募者らは2016年4月から7月まで、視覚に障害のある留学生が在籍する教育機関にて日本語補習クラスを担当した。その際に応募者らで共有した授業記録には、語彙や文型の導入、口頭練習を行う際に学習者に見られた混乱や、説明の難しかった学習項目等が記録されている。本発表では、この記録の分析を通して、視覚に障害をもつ学習者特有の困難さを伴う項目を明らかにし、教室での課題解決の方法を示す。

33. 作文支援ツール「文体チェッカー」の開発と評価

金庭久美子（立教大学）・川村よし子（東京国際大学）・橋本直幸（福岡女子大学）

本研究の目的は、学習者の作文支援ツールの一つとして、web上で入力された文章の文体を自動でチェックできる「文体チェッカー」の開発にある。「文体チェッカー」は、「文体リスト」と照合し、文字列が合致した場合、「デスマス体」なら「敬体」、「ダ／デア体」なら「常体」と表示する。本システムの評価実験を行った結果、日本人の書いた文章は、正しく作動することが判明した。一方、学習者の文章を入れた場合には、文体の判定がされると同時に、誤用の明示が必要であることがわかった。そこで、システムの改良を行うとともに、学習者の誤用等、新たに判明した問題点への対応もできる仕組みを取り入れることにした。

34. 小・中学校教科書の語彙分析ー連語の観点からー

安藤句美子（恵泉女学園大学）

本研究は、外国につながる子どもたちの高校入試支援を目的とした小・中学校教科書の語彙分析である。語彙分析は連語の観点から行った。まず、BCCWJの小・中学校教科書を対象として、どのような連語が使われているか調査した。そして、その連語等に分析・考察を加えた。これらの調査、分析・考察から「小・中学校教科書連語等リスト」を教科別に作成した。連語等リストには、名詞、動詞の意味の補足に加え、分野の表示、対義の句、共通連語等の表示をした。最後に、このリストを基に、具体的な指導方法として、連語等に注目した宿題や復習のためのプリントを作成した。

【会場案内】

日本学生支援機構東京日本語教育センター

〒169-0074 東京都新宿区北新宿3-22-7

<http://www.jasso.go.jp/toiawase/tjlec.html>

JR 中央・総武線 「大久保」駅 北口 徒歩 9 分

JR 中央・総武線 「東中野」駅 東口 徒歩 9 分

都営大江戸線 「東中野」駅 A1 徒歩 11 分



【昼食交流会】

今回も午前のポスター発表終了後、会場のA棟地下にて昼食交流会を行います。ぜひご参加ください。会費は1000円です。昼食をとりながら、参加者のみなさんと自由に楽しく交流しましょう。

【会費納入のお願い】

JLEM では 4 月から翌年 3 月までを会計年度としております。2016 年度会費（3,000 円）未納の方は早急に納入いただきますようお願いいたします。2 年分未納の場合は会員資格を失います。会費は、会場の混雑を避けるためにも、可能な限り、事前に郵便局にて下記の口座に「電信振込」でお振込みください。郵便局に口座を持っている場合、振り込み手数料は無料になります。ご不明な点がおありでしたら、jlem-ml#jlem-sg.org (#は@です)まで e-mail にてお問い合わせください。

【振込先】 (1) 郵便局の「電信振込」で払い込む場合

記号：10140 番号：69076511 加入者：日本語教育方法研究会

(2) 銀行から振り込む場合

銀行名：ゆうちょ銀行

店名：〇一八 店（ゼロイチハチ店） 金融機関コード：9900 店番：018

預金種目：普通（または貯蓄） ※預金種目は「普通」「貯蓄」のいずれでも振込可能

口座番号：6907651

口座名：日本語教育方法研究会

今回の第 47 回研究会は、特例で 2016 年度第 1 回の研究会となります。したがって、2016 年度会費を既に納入いただいている会員の方は会費の納入は不要になります。会場での会費の納入は基本的に受け付けておりませんので、2016 年度会費未納の方、今回新たに会員になるご予約の方は、事前の会費納入（上記参照）にご協力ください。